

新収蔵資料抄

ローシー・オペラと浅草オペラ

大正期翻訳オペラの興行・上演・演劇性

中野 正昭／著 森話社 2022.6 571p 22cm
766.1/ネ 26 2022.08.19 受入 定価 4,900 円＋税



最寄り図書館に取り寄せ可

目次

序章	第八章 大歌劇『ファウスト』—グランド・オペラ上演の試み
第Ⅰ部 ローシー・オペラとローヤル館	第九章 歌劇『椿姫』—浅草オペラの<演劇性>
第一章 ローヤル館—日本最初のオペラ専門館	第Ⅳ部 歌劇女優という存在
第二章 ローシー・オペラの興行展開	第十章 浅草の女優と宝塚の少女 —浅草オペラ雑誌に見る宝塚少女歌劇
第三章 ローシー・オペラ『椿姫』のリブレット	第十一章 澤モリノの足跡と物語—浅草オペラ時代を中心に
第Ⅱ部 浅草オペラの環境	終章
第四章 オペラという見世物—浅草オペラと観物場興行	資料 翻刻／ローシー・オペラ『椿姫』リブレット
第五章 オペラ座と小松耕輔—<日本館時代>再考	翻刻／オペラ座『チョコレート兵隊』台本
第Ⅲ部 台本による浅草オペラの上演分析	翻刻／オペラ座『椿姫』検閲台本（浅草興行用）
第六章 浅草オペラの台本—「小松耕輔浅草オペラ関連資料」をもとに	「観物場取締規則」全文
第七章 喜歌劇『チョコレート兵隊』—翻訳オペレッタと<ダイジェスト版>	参考文献 / あとがき / 索引

資料概要

明治末から昭和初期は、西洋由来の演劇が日本で受容されていった時代にあたる。オペラもその一つで、この時期には、帝国劇場（以下「帝劇」）歌劇部の創設と解散、ローシー（Giovanni Vittorio Rosi 1867-1940）率いる「ローシー・オペラ」の旗揚げと解散、高木徳子一座の浅草進出、元帝劇歌劇部や元ローシー・オペラの人々が複数のオペラ団を旗揚げした「浅草オペラ」の興隆など、オペラ史上の重要な出来事が相次いで起きた。

一般には、帝劇やローシー・オペラは本格オペラを志向して挫折し、大衆オペラ＝浅草オペラに人材が流れ、傍流ともいえる浅草オペラが人気を博して昭和レビューにつながった、と言われる。しかし著者はこうした単純な整理を良しとせず、興行、上演、演劇性の3つの要素から、日本におけるオペラの受容を観客側の視点で考察する。

帝劇歌劇部の指導者を務め、その解散後にローシー・オペラを興したローシーは、実は音楽家でなく舞踏家である。そしてオペラハウスでなく、バラエティ・シアターで活躍してきた人だった。ローシー・オペラでは、およそ本格志向とはいいがたい原作のカットや改作もしていたことから、彼が日本で行おうとしていたものは、本格オペラというより、当時最新のバラエティ・シアターに似た興行だったことが分かる。

一方、本書では、芸術性が低く当時も低俗とされていたというような浅草オペラへの評価が、後世の曲解に基づ

くものだったことも説かれている。

原作を改変する、歌曲の歌詞をセリフに置き換える…。確かに当時のオペラには、ご都合主義とも見える原作からの離脱があった。しかしそれはむしろ、様々な制約の中で工夫を凝らした再構築と呼ぶべきものだった。そして浅草オペラは演劇性を飛躍的に深化させ、日本のオペラを、聞く「音楽」劇から、観る音楽「劇」へと変えた。このことで、大正期の観客がオペラに求めたものに就いていったと著者は考える。

オペラからオペレッタ、バラエティ・ショー、そしてミュージカルへ。貴族からブルジョワジー、そして大衆へ。ヨーロッパでは数百年もかけ、音楽劇もその観客も変化した。日本はその伝統と、国際的同時代性を、一度に取り入れようとした。オペラ受容期のトピックの数多さはそれを物語っている。

著者紹介

中野正昭(なかの まさあき)

1971年、福岡県生まれ。明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士後期課程単位取得退学。博士(文学)。専門は日本近現代演劇、演劇世相史、大衆文化論。2005(平成17)年より早稲田大学坪内博士記念演劇博物館助手、同博物館招聘研究員、他に明治大学、神田外語大学、立教大学、早稲田大学等の兼任講師を経て、淑徳大学人文学部表現学科教授。主な著書として、単著『ムーラン・ルーージュ新宿座—軽演劇の昭和史』(森話社)、共編著『ステージ・ショーの時代』『浅草オペラ 舞台芸術と娯楽の近代』(以上、森話社)、共著『井上ひさしの演劇』(翰林書房)、『戦後ミュージカルの展開』『演劇とメディアの20世紀』(以上、森話社)、A History of Japanese Theatre, Cambridge University Press など

本紙は、県立図書館が新たに所蔵した資料(図書資料・視聴覚資料)から、ぜひご利用いただきたいものを厳選してご紹介するものです。これらの資料は、禁帯出資料を除き、最寄りの図書館に取り寄せできます。

なお、本紙の内容はWebにも掲載しています。ご覧の際は右のQRコードをご利用ください。
また、内容の誤り等、お気づきの点があればお知らせくださるようお願いいたします。



澤モリノ (1890?-1933)

本書には、受容期のオペラで活躍した多くのキーパーソンが登場する。ローシーはもちろん、ローシーにオペラ団立ち上げを働きかけた原信子や清水金太郎などの元帝劇歌劇団幹部、根岸哲や竹内一郎ら興行師たち、翻訳を手がけた作詞家の小林愛雄や作曲家の小松耕輔、モダンダンスの開拓者・石井漠。そして、「歌劇女優という存在」と題された本書第Ⅳ部で、2章を割いて検証される「舞踊の女王」、澤モリノ。

浅草オペラの巨頭、澤モリノ（本名・深澤千代。明治 22 年？生まれ）は、帝劇歌劇部出身でクラシック・バレエを得意とした歌劇女優だ。父は群馬県（前橋）生まれであり、モリノ自身、前橋で生まれたとする説もある。同様に人気者だった河合澄子らいわゆる発展女優と対照的に、風姿楚々の優等生的な真面目さで、学生など若年層に数多くの熱狂的なファンがいた。

第一次世界大戦期の好況に支えられた浅草オペラの活況は大戦の終結で陰り、やがて関東大震災でその息の根を止められてしまう。モリノも旅回りの一座に身を落とし、糊口を凌ぐ日々を強いられた。晩年公演のため大陸に渡り、最後は平壤でその生涯を終えた。享年 43 歳。戦争の足音が聞こえる昭和 8 年のことだった。

私生活の度重なる不幸もあった。著者はモリノを敬愛と憐憫を込めて「まるで良くできた悲劇のヒロイン」と評している。

関連所蔵資料

書名・CD タイトル	責任表示	出版社	発行年	資料番号
浅草オペラ物語 歴史、スター、上演記録のすべて	増井 敬二／著	芸術現代社	1990	00577189
浅草オペラ舞台芸術と娯楽の近代	杉山 千鶴／編	森話社	2017	13385695
演劇と音楽 Theater and Music	森 佳子／編	森話社	2020	13648167
井上ひさしの演劇	日本演劇学会分科会日本近代演劇史研究会／編	翰林書房	2012	13234042
板垣鷹穂クラシックとモダン	五十殿 利治／編	森話社	2010	11913795
岸田國土の世界	日本近代演劇史研究会／編	翰林書房	2010	13016530
20 世紀の戯曲（全 3 巻）	日本演劇学会分科会日本近代演劇史研究会／編	社会評論社	2005	07253610 ほか
[C D] 懐かしの浅草オペラ（ホッと倶楽部キング C D 文庫我が青春譜）		キングレコード	1998	05713763
[C D] 浅草オペラ：華ひらく大正浪漫		山野楽器	1998	05711650